

# 火の海を泳いで

加藤 千枝子

野方二丁目

昭和二〇年三月九日の夜、母は姉と一歳の甥を疎開させるため山形まで送って行くことになりました。義兄はその前年九月に出征しており、私は上野駅まで母を見送りに行き、十時頃帰宅しました。

床について一時間ほどした頃、「起きなさい」と父の大きな声。「いつもと違うぞ、相当飛んでいる」。B29のことでした。

私は疲れて寝入ってしまった空襲警報にも気がつきませんでした。目をあけると、闇の中で、日章旗のように紙を張った部屋の窓ガラスがオレンジ色に見えました。「天神様あたりじゃないか」。私は飛び起きて夢中で寝間着の上からセーターを着て、もんぺをはき、オーバーをはおり、太いベルトで身体を引締め、防空頭巾をかぶりしました。「持った物は身体につけろ」と言いながら、父は何か包んで身体に巻いていました。後になって聞いたのですが、位牌と神棚の天照皇大神宮のお札とのことでした。父は私に「配給のタバコを持って逃げろ」と大声で叫びました。隣組の郡長をしていた父には、隣組のタバコがよほど気になっ

たのでしよう。私はリュックサックにタバコを詰め込み、本箱からアルバムを取り出し、タバコの上から押し込みました。日頃から母は「命あつての物種、品物はまた買えるが命は買えない」と言っていました。私は手さぐりで、二度と買えない青春の思い出が沢山詰まったアルバムを探し出したのです。

親子が各自それだけを持って外に飛び出したら、あたりは夕やけのように明るく、空からは雪の降るように火の粉が降っているのです。父はすぐ家の中に入り、掛けぶとんを二枚持ってきましたが、火の粉がつくのでそばの防火用水桶の水に浸して、私と自分の頭に一枚づつ被せました。でもすぐに、重くて首が折れそうになり、放り出してしまいました。どの方面に逃げればよいのか見当がつかず、亀戸駅か水神様の境内か迷っているうちに、天神橋あたりにB29から落とされた焼夷弾が、パラパラと火の玉になって降っているのです。身体に降りかかる火の粉を払い除けながら、追われるように前進するだけでした。

途中で箒屋のおじさん（並木さん）に逢いました。いつも愉

快な楽しい方で、夏の夕涼みの頃には縁台に皆を集めて、話に花を咲かせていました。並木さんは荷車に沢山の荷物を積んで、あの火の飛び散っている中をひいていましたが、アツと言う間に荷物に火がつき、たちまち燃え上がりました。あわてて荷車を倒してしまい、後から逃げて来る人達の逃げ道をふさいでしまいました。私は父と二人で急いで荷車の梶棒をまたいで、ホツとして振り返ると、電柱が火柱となり、荷車の上に倒れてきました。並木さんは火柱と火の車の間にはさまれて、姿が見えなくなっていました。一瞬立ち止まった私は、父にせかされ火に追われてまた歩き出しました。振り返ると我が家の方角は全部火の海でした。涙が出て止まらず、恐いというより悲しい気持でした。死ぬかもしれない、死ぬならみんなにもう一度逢って死にたいと思ったものです。気の強すぎる私は、よく母から男に生まれてくれればよかったと言われましたが、気が強いからここまでやって来られたのだと自賛しています。

ようやく十間川を越え、日立製作所の広場に着きましたが、火の粉の雨、リュックについた火の粉はたちまちカチカチ山となり、タバコが沢山つめてあったので消しようもなく、急いでリュックを投げ捨てました。アルバムだけでもと思いましたが、火は一メートルくらい燃え上っていました。火が燃えると風が起こるといわれるとおり、風と火が入り乱れ、握りこぶしほどの火の玉が飛んで来ます。そのため父ともはぐれてしまいました。

た。みな降りかかる火の粉を消すために転げまわりました。近くに防空壕があったので「入れて下さい」と頼みましたが、満員だからと断られてしまいました。しかし、その防空壕は、一夜明けた時はみな蒸し焼きになっていたとのことです。父も火だるまの人になりつかれ、巻いていたゲートルに火がつき大火傷をしました。私も手や両足首に火傷し、運動靴は底がとけて、足の裏は火ぶくれになり、歩けなくなっていました。顔は火にあぶられ、目はあけられず、かすかに見えるだけでしたので、物につまづいて倒れた時に頭を打ち、気絶してしまいました。かすかに覚えているのですが午前三時頃でした。

急に寒さを感じて気がつく、警防団の方が二、三人立っていて「大丈夫か」と聞かれました。私はすぐ立ち上がり「大丈夫です」と答えました。その方たちは死体を調べて歩いていたので。傍にいた見知らぬおばさんが、見かねて私の寝間着の片袖をはぎとり、顔半分に巻いて下さいました。可愛想に思ったのでしよう。私が助かったのは、日立のガレージの陰だったので。焼けついたコンクリートにしがみついたので、指紋がなくなるほどに掌を焼きました。見えにくい目で死体をよけながら、焼け跡の我が家に行きましたが、父は来ていませんでした。歩けなかったのです。近所の方が江戸川の親戚に行くといわれ、私の叔父の家が近くなので連れて行ってくれました。叔父の家に着くと玄関で倒れてしまいました。安心したのです。

それから後、七月七日の七夕にようやく歩けるようになりまし  
た。十九歳の春から夏にかけての忘れられない出来事です。

昭和二〇年三月十日は日本晴れでした。細くあけた目にも昨  
夜のあの地獄のようなことは夢のようです。

亡くなった母は、戦後日立のガレージの所を電車で通るたび  
に、私を助けてくれた所だと手を合わせていたとのことです。

